第一部　第一話　おしたに伝説

そうねえ、今から何年ぐらい前のことかねえ。この北潟東のさんまい道を二キロぐらい登っていくと、大きな穴が一つあいていたんや。その穴の右側には、昔、水がしゅくじゅくと出ていてねえ、その上は、いつもお天とうさんがあたるようになっていて、穴の奥から生ぬるい風が吹いてくるんや。

だれかが住んでいたそうなんやけど、その姿はだれも見たことないんや。そこで、その隠れて住んおった人を、『いんじゃ』と言ったんやと。そのころの北潟は、びんぼうな村やったんや。ほやのう、例えば、こんなことがあったんや。

ある日、大吉さん家で、お葬式があったんや。それには人をよっだいなあかんのや。ほやけど、お椀やお膳なんか、だれも持っていなかったんや。でも、お椀とかお膳とかがなけんとあかんさかいに、おし谷

の穴の前に行って、いんじ様にお願いしたんやと。

「あした、うらんとこの葬式やさけんてに、お椀とお膳を貸して下されな。」

と、何人前も頼んだんやと。

あくる日、もう一度お願いに行くと、穴の前にはちゃんとお椀とお膳がそろえてあったんや。大吉さんは大喜びで、そのお椀やお膳を持って帰っての、ごちそうを盛って村人たちに出したんやと。

ところが、そのお椀やお膳はあまりに美しくての、村人の中にはもて遊ぶ者がいたんやと。そうやっているうちに、そのお椀の一つをだれかが踏んづけて、割ってしもうたんや。

村人たちは、どうしょうかと思い悩んだんやと。そんな中、

一人の若者がこう言うたんや、

「こんなにぎょうさん貸してもろたんやさけ、一つぐらい返さんでも分からんやろう。」

ってね。次の朝、

「本当に、ありがとうございました。」
と、割ったことを黙って返してしもうたんや。
それから一ヶ月過ぎたんや。今度は、村にお嫁さんが来るようになっての。村人たちは、またお椀やお膳を、いじん様の所に貸してもらいに行ったんや。
「お椀とお膳を、三十ばかり貸して下せえ。おねげえします。」
と、頼んだんや。
次の日、それをもらいに穴の所に行ったんや。次の日も、そして、また次の日にも行ったんやけど、一つも貸してくれんかったそうな。もし、お椀を割ってしまった時、
「割ってしもたんです。すんまへん。」
と、正直に謝っておけば、どうなっていたんやろう。次ん時にも、貸してくれたやろうかねえ。